

リサーチグループ登録届出書

平成 25 年 7 月 5 日

1. リサーチグループの概要

リサーチグループの名称 情報プラクティス (iPractice)
リサーチグループの名称(英語) Information Practice (iPractice)
分野 (1.人文系、2.理工系、3.生物系、4.複合系) 4
設置開始時期 2013 年 8 月
設置終了時期 2018 年 7 月

2. リサーチグループ代表者

所属・職名 図書館情報メディア系・准教授
氏 名 上保秀夫
氏名(英語) Hideo Joho

3. 連絡先

所属・職名 図書館情報メディア系・准教授
氏 名 上保秀夫
電 話 029 859 1337
F A X 029 859 1093
E - m a i l hideo@slis.tsukuba.ac.jp

4. 担当部局 (当該リサーチグループの運営等を管理する部局名)

図書館情報メディア系

5. 構成員一覧について

氏名	所属部局	職名	専門	学位	役割分担
佐藤哲司	図書館情報メディア系	教授	情報アクセス論、データ工学	博士	情報実践 データ解析
上保秀夫	図書館情報メディア系	准教授	インタラクティブ情報検索	PhD	統括および情報実践評価
関洋平	図書館情報メディア系	助教	情報アクセス技術、自然言語処理	博士	情報実践 コミュニケーション
高久雅生	図書館情報メディア系	准教授	情報検索、デジタルドキュメント	博士	Web 上における情報実践
手塚太郎	図書館情報メディア系	准教授	情報検索、統計的言語モデル	博士	情報実践の言語モデル
松林麻実子	図書館情報メディア系	講師	情報行動論、メディア分析	修士	情報実践モデルの構築
松村敦	図書館情報メディア系	助教	情報学	博士	情報実践支援システム構築

共通様式③

6. 科研費細目番号	主なものから順番に3つまで記載してください。		1303 図書館情報学・人文社会情報学	1104 マルチメディア・データベース	1302 ウェブ情報学・サービス情報学
7. キーワード(5つまで)	情報検索	情報推薦	情報行動	ウェブ情報システム	情報実践
8. キーワード(英語)	Information Retrieval	Recommender Systems	Information Behavior	Web Information Systems	Information Practice
9. 研究グループHP	URL を記載してください。	https://www.facebook.com/ipractice.tsukuba			
10.研究グループ概要(100字程度)					
<p>情報プラクティス研究グループ(iPractice)は、情報メディア社会における情報実践の実態調査、認知および行動データ解析、支援システムの開発と評価を通して、情報利活用のベストプラクティスを確立することを目的とする。</p>					
11. 研究グループ概要(英語)					
<p>Information Practice Research Group (iPractice) aims to establish the best practice of information access and use in the information media society by surveying information practice and experience, analysis of cognitive and behavioral data, and development and evaluation of user supporting systems.</p>					
12. 設置の目的及び必要性					
<p>近年、情報行動の研究者を中心に情報プラクティス(実践)への発展の必要性が議論されている。情報プラクティスでは既存の情報探索行動を中心とした研究対象を拡張し、情報共有や協調利用などにも焦点を当てている。また研究方法も従来の社会的なもののみならず、認知的や工学的アプローチを積極的に取り入れることが期待されている。このような背景をふまえ、本研究科において情報プラクティスに焦点をあてた研究グループを長期的に設置することは意義のあることであり、研究科の学際的な特色を活かすよい機会であると考えられる。</p>					
13.研究計画					
<p>構成員の役割分担に沿って情報実践に関する諸側面(情報利活用の実態調査、認知行動分析とデータ解析、協調作業とコミュニケーション分析、情報実践支</p>					

援システムの構築と評価など)の研究開発を平行して進め、毎年進捗状況の確認と新しい知見の共有を行う。研究グループ内の共同作業の流れは以下の通りである。

- (1) 実態調査による問題点の洗い出し
- (2) 認知行動分析による詳細なユーザモデルの構築
- (3) ユーザモデルを土台とした支援システムの開発と評価
- (4) 協調作業(共有)への応用
- (5) (1)へ戻る

成果報告の機会として、3年目にそれまでの成果を中心に、情報プラクティスに関するワークショップを開催する。最終年度は、それまでの研究成果を基にして、情報実践のベストプラクティス事例をまとめ、今後の方向性を考察する内容の書籍を分担で執筆することを目標とする。

14. 研究・教育に期待される効果(箇条書き)

- (研究) 情報プラクティスという新しい学際的分野を展開し先導する
- (研究) 情報検索や情報推薦などの主要技術を利活用の側面から発展させる
- (教育) 情報の利活用の複雑さを理解すると共に、既存技術の限界を批判的に分析できる
- (教育) ユーザモデルとシステム開発のバランスの取れた人材が育成される